

# 市民会館を無償貸与

## 南九州市長受け入れ表明

都城市

都城市の長峯誠市長は九日、解体を決めていた市民会館について、南九州学園(宮崎市、澁谷義

夫理事長)から申し入れがあった二十年間の無償貸与を受け入れることを明らかにした。市は九月議会で可決していた解体工事費の補正予算案を十二月議会で減額補正し、来年秋にも同学園と協定書を取り交わす予定。

市によると、同学園の要望通り会館のアスベスト除去と吸音断熱材の吹き付けなど復旧工事を市が行った上で、学園側が改修を加える。

アスベスト除去工事は来年一月以降に始まり、八月ごろ完了予定。その後、無償貸与の協定書を締結し、学園側が改修工事に着手する。改修費は三億円を見込んでいる。貸与期間中の改修、維持管理費や事故などによる

人的、物的損害の保障などから、市民会館の貸与を市に申し入れた。キャンパスが開学する二〇〇九年四月開館を目指している。改修費は、約三億六千万円と試算する都城市立野町の宮崎産業経営キャンパスの建設・移転大跡地に講堂がないこと経費に含んでいる。

同学園は十月末、南九州大高鍋キャンパス(高鍋町)の移転先となる同十六億円と試算する都城市立野町の宮崎産業経営キャンパスの建設・移転大跡地に講堂がないこと経費に含んでいる。

2007. 11. 10 5:30 PM

## 都城市民会館存続

## 社説

# 「廃棄」を「活用」に変え街づくり

まるで建築のメタボリズム(新陳代謝)が思いをリレーし、時代をつないで変成していく軌跡を見るようだ。

解体が決まっていた都城市民会館が一転、存続することになった。

同市に南九州大学を移転する学校法人・南九州学園(宮崎市)が二十一年間の無償貸与を申し入れ、同市が正式に同会館の存続を決定したからだ。

市は九月定例議会でも同会館の解体工

事費などを可決、来年一月に着予定だった土壇場での「復活」である。

市の英断を高く評価したい。

それは公共建築物の運命を変えただけではない。当然視された老朽施設の「廃棄」を、「活用」に転換させる都市文化としての新たな価値を持つ。

南九州大学の講堂に

「捨てる神あれば拾う神あり」を地

でいくような経緯である。

都城市民会館は、老朽化しているうえ新たな総合文化ホールが完成し、年間約二千万円という維持費がネックとなり今年二月、解体が決まった。

周知のように、同会館はわが国の代表的な建築家・菊竹清訓氏の設計で一九六六年に開館。メタボリズムという理念を体現した日本モダニズム建築の傑作として知られている。

だが、同市は財政難に加え、市民アンケートでも「解体」賛成が多かったことなどから存続を断念。同会館の解体は「秒読み」段階に入っていた。

そこへ降ってわいたように出現した同学園の「救い主」である。

同学園は、同会館が移転を予定している南九州大学で講堂として使えること、また文化的価値の高い公共建築物を保存できることなどを理由に無償貸与を申し入れ、市も承諾した。

アスベスト除去と復旧工事は市が行い、貸与期間中は同学園が自主運営することになる。市民の中にも今回の決定を歓迎する声は多い。

戦後の代表的建築物

「解体か存続か」に揺れた同会館問題が投げかけた意味は二点ある。

一つは、市財政と「公共建築」の関係である。もとより財政が自治体運営の土台であるの言うまでもない。

だが、財政論のみで、つまり維持・管理ができないという理由だけで存廃が決定されれば、街の一つの風景と化し、極めて高い公共性を持った建築物の「社会的意味」が失われる。

同会館の建設にも多額の税金が投入され、しかも四十年にわたって市民文化の発信源になっていたのである。整理するにはそれなりの理由がある。

もう一つは、同会館の建築的価値が地元にとどまらず、戦後日本のモダニズム建築という文脈でとらえられるスケールを持っていたことだ。

建築運動としてのメタボリズムは、「進歩」「希望」などに象徴される近代化の貪欲なエネルギーを表象している。同会館の真形の相貌、大空に向かってダイナミックに飛翔するイメージはその端的な表現だった。

戦後日本は飛躍的な発展を遂げ、主要な街並みをメタボリズム建築が飾った後に、全国で消滅の危機にあるその代表的建物が同会館だった。

戦後の活力に満ちた時代の記憶が、同会館の風景に刻まれている。解体が惜しまれたのも当然である。

タイムリミット寸前で「拾う神」に恵まれた幸運もあるが、これから「活用」の新たな段階に入る同会館。

都城の都市文化が、歴史・建物・景観を取り込んだ街づくりに挑む。

「捨てる神あれば拾う神あり」を地

でいくような経緯である。

都城市民会館は、老朽化しているうえ新たな総合文化ホールが完成し、年間約二千万円という維持費がネックとなり今年二月、解体が決まった。

周知のように、同会館はわが国の代表的な建築家・菊竹清訓氏の設計で一九六六年に開館。メタボリズムという理念を体現した日本モダニズム建築の傑作として知られている。

だが、同市は財政難に加え、市民アンケートでも「解体」賛成が多かったことなどから存続を断念。同会館の解体は「秒読み」段階に入っていた。

そこへ降ってわいたように出現した同学園の「救い主」である。

同学園は、同会館が移転を予定している南九州大学で講堂として使えること、また文化的価値の高い公共建築物を保存できることなどを理由に無償貸与を申し入れ、市も承諾した。

アスベスト除去と復旧工事は市が行い、貸与期間中は同学園が自主運営することになる。市民の中にも今回の決定を歓迎する声は多い。

戦後の代表的建築物

「解体か存続か」に揺れた同会館問題が投げかけた意味は二点ある。

一つは、市財政と「公共建築」の関係である。もとより財政が自治体運営の土台であるの言うまでもない。

だが、財政論のみで、つまり維持・管理ができないという理由だけで存廃が決定されれば、街の一つの風景と化し、極めて高い公共性を持った建築物の「社会的意味」が失われる。

同会館の建設にも多額の税金が投入され、しかも四十年にわたって市民文化の発信源になっていたのである。整理するにはそれなりの理由がある。

もう一つは、同会館の建築的価値が地元にとどまらず、戦後日本のモダニズム建築という文脈でとらえられるスケールを持っていたことだ。